

## 大里峠の大蛇

長い大里峠の頂上にまもなく着こうかとしたとき、先頭に行くイトーが馬から転げ落ちた。

「痛てて！」

馬がなぜ暴れたのか。行く手を見ると峠道を何か白い巨大なものが、ずるずると横切っていく。馬を引いていた男に尋ねると、びっくりする答えが返ってきた。

「大蛇かもしれねえ。この雨で生き返ったんだべが」

「大蛇？生き返った？何それ」

若いイトーは背中がゾクゾクしてきた。

「昔な、大里峠には大蛇が住んでいて、荒川の水をせき止めて、関川村を泥の海に沈めようとしたんだ。そんな時は、琵琶法師のおかげで大蛇は退治されだんだ。

大蛇は、たいそう水が好きでな、今年の雨は特にひでえがら、生き返ったのかも知んねえ。

「なんだあ！それ」

イトーは馬から落ちたばかりだというのに、腰を抜かしてへたり込んでしまった。

馬引きの男は、大蛇伝説を語り始めた。

大里峠の下には飯豊連峰と朝日連峰の水を集めて西から東に荒川が流れている。その支流の女川に蛇喰村に炭焼きの忠蔵と、おりのという夫婦が住んでいた。

ある日の暖かい午後、忠蔵が昼寝をしていると、ズル、ズルっとみような物音が近づいてくるではないか。目を開けると、大蛇が迫ってきた。マサカリをつかんだ忠蔵は、大きな口をあけて忠蔵を食おうとする大蛇と必死で戦った。戦うこと半時、なんとかしとめることができた。忠蔵はその大蛇をみそ漬けにするこ

とに決め、てきとうな大きさに切って家に持ち帰った。そして樽に入れてみそ漬  
けにしてみたが、樽は合わせてで十三個半になりました。  
忠蔵はおりのと娘に「樽の中は決して見てはいけないよ」と言いきかせた。しか  
し、見るなど言われれば、見たくなるのが人の常。何日かして、おりのは「少し  
のぞいて見るだけ」と樽を開けてしまった。



そしてみそ漬けの肉を一切れ食べてしまった。そのあまりのおいしさにああ  
と一切れだけ、これが最後と思いがらと次々に食べ続け、しまいにはすべてを  
たிரらげてしまった。のどがかわいたおりのは、女川の水を飲み始めた。そのと  
たん、おりのは水面にうつる自分の顔を見ておどろいた。なんと、人間の姿は消  
えて大蛇の姿になっていたのだ。

夕方、忠蔵が仕事から戻ると「おつかあがない」と娘が泣いていました。忠  
蔵はからっぽになった樽を見て、「しまった」と思いながら、そしておりのを探  
しに出たが見つからなかった。

それから何年もたった夏のおわりのある日のこと。目の不自由なあんまである座頭さんが米沢街道を歩いていた。ちょうど大里峠で夜になったので、座頭さんはほこらの前にすわって休むことにした。そして琵琶の演奏を始めた。一曲をひきおえると、どこからか女の声がかかります。「もう一曲、聞かせて下さい」。座頭さんはたのまれるままに琵琶をひき続けた。その後、女に身の上をたずねてみたら女は答えた。

「私はもともと、人間で夫も娘もいましたが、わけがあつて大蛇になつてしまつたんです」

ビックリしている座頭さんに女はなおも言いました。「体が大きくなつたので住む所もせまくなりました。なので、貝附のせまい所をせき止めて、荒川や女川のあたりを大きな湖にして、そこに住もうと思つています。だから座頭さん、あなたは安全な場所へ逃げた方がいいですよ。でも、このことはだれにも言わないで下さい。もし、ばらしたら命はありませんよ」

座頭さんは大変だと思ひ、下関へと急いだ。大蛇が川をせき止めたら村は湖の底にしないでしまふ。それを知らせるために大庄屋の渡辺三佐工門の家へかけつけた。



すべてを話した座頭さんは、話終わると「うっ！」と息を詰まらせて、そのまま死んでしまった。三佐工門は村の人々を集め、相談を始めました。座頭さんが息をひきとる直前に「大蛇は鉄がとてもきらいです」と言ったのを思いだし、村中の鉄を集めて大きなクギをたくさん作ることにした。そしてそのクギをみんなで大里峠まで運び、あたり一面に打ちつけた。

すると大蛇が姿をあらわして苦しみ始めた。それは7日7晩の間つづき、村人たちは眠れない日々を過ごした。やがて大蛇は息絶えて、村は助かったのだった。村人たちは危険を知らせてくれた座頭さんに深く感謝し、神様としてまつるこ

とにした。今でも下関には、座頭さんののこした琵琶がまつられている。

馬引きの長い話を聞いて、イトーが言った。

「わかりました。大蛇に襲われないうちに、早くこの峠を降りましょう」

一行は、大里峠を下り始めた。ふもとの玉川部落に通じる道は、上ってきた道よりもいくぶんなだらかで、草が良く刈られていて進みやすかった。